

【特集】 Special Talk Session

沖縄県北部地域の 新型コロナウイルス 感染症対策

オール沖縄で医師のキャリアを考えるマガジン

Muru Uchina

ムルウチナー

2022

Vol. 09

コロナ禍の沖縄と医療



Muru Uchina

ムルウチナー

オール沖縄で 医師のキャリアを考えるマガジン

沖縄で活躍する医師たちを通して

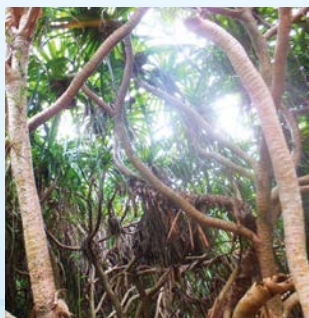
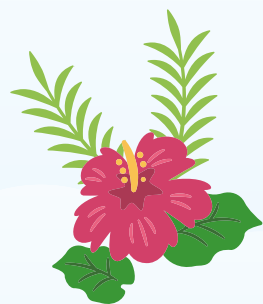
沖縄の医療と臨床研修の魅力を紹介するマガジン『ムルウチナー』。

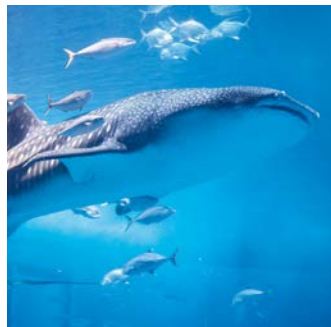
『ムル』は全部、『ウチナー』は沖縄を意味します。

今号は、新型コロナウイルス感染症と最前線で闘ってきた医師の声から、

パンデミックを乗り越えた先進的な取り組みと、

沖縄に息づく医療の魅力に迫った特別号です。





2022. Winter vol.09

INDEX

コロナ禍の沖縄と医療

P.02

Special Talk Session

〔特集〕沖縄県北部地域の新型コロナウイルス感染症対策

先進的な感染症対策を実現した役割分担の明確化と
有機的な連携によるチームワーク

北部地区医師会病院
諸喜田 林 病院長

北部地区医師会
上地 博之 会長

沖縄県立北部病院
久貝 忠男 院長

沖縄県保健医療部 地域保健課
山川 宗貞 所長



P.06

Special Interview

沖縄で長く培われてきた
感染症・総合診療の土台と強固なチーム医療

琉球大学病院
感染症・呼吸器・消化器内科学講座(第一内科)
藤田 次郎 教授



P.08

Sunset of the Island

沖縄ドクターズ物語

P.12

OKINAWA DOCTORS SCENE #1

in

北部地区医師会病院

～ やんばるで働く医師の話 ～

呼吸器・感染症科 科長
医療連携統括部長

田里 大輔 先生

呼吸器・感染症科

日暮 悠璃 先生

消化器外科

仲本 正哉 先生



P.15

OKINAWA DOCTORS SCENE #2

in

沖縄県立北部病院

～ やんばるで働く医師の話 ～

救命救急科 部長

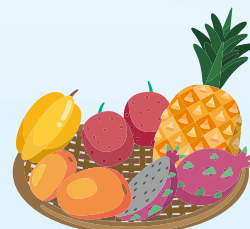
高良 剛 ロベルト 先生

内科

永田 恵蔵 先生

内科

具志堅 愛夏 先生



Special Talk Session

先進的な感染症対策を実現した 役割分担の明確化と 有機的な連携によるチームワーク

離島を含む12市町村で構成され、人口は約10万人。

沖縄本島の約66%の面積を占める沖縄県北部地域には、

急性期病院が沖縄県立北部病院と北部地区医師会病院の2病院しかなく、

中南部地域と比べて医療資源は圧倒的に少ない。

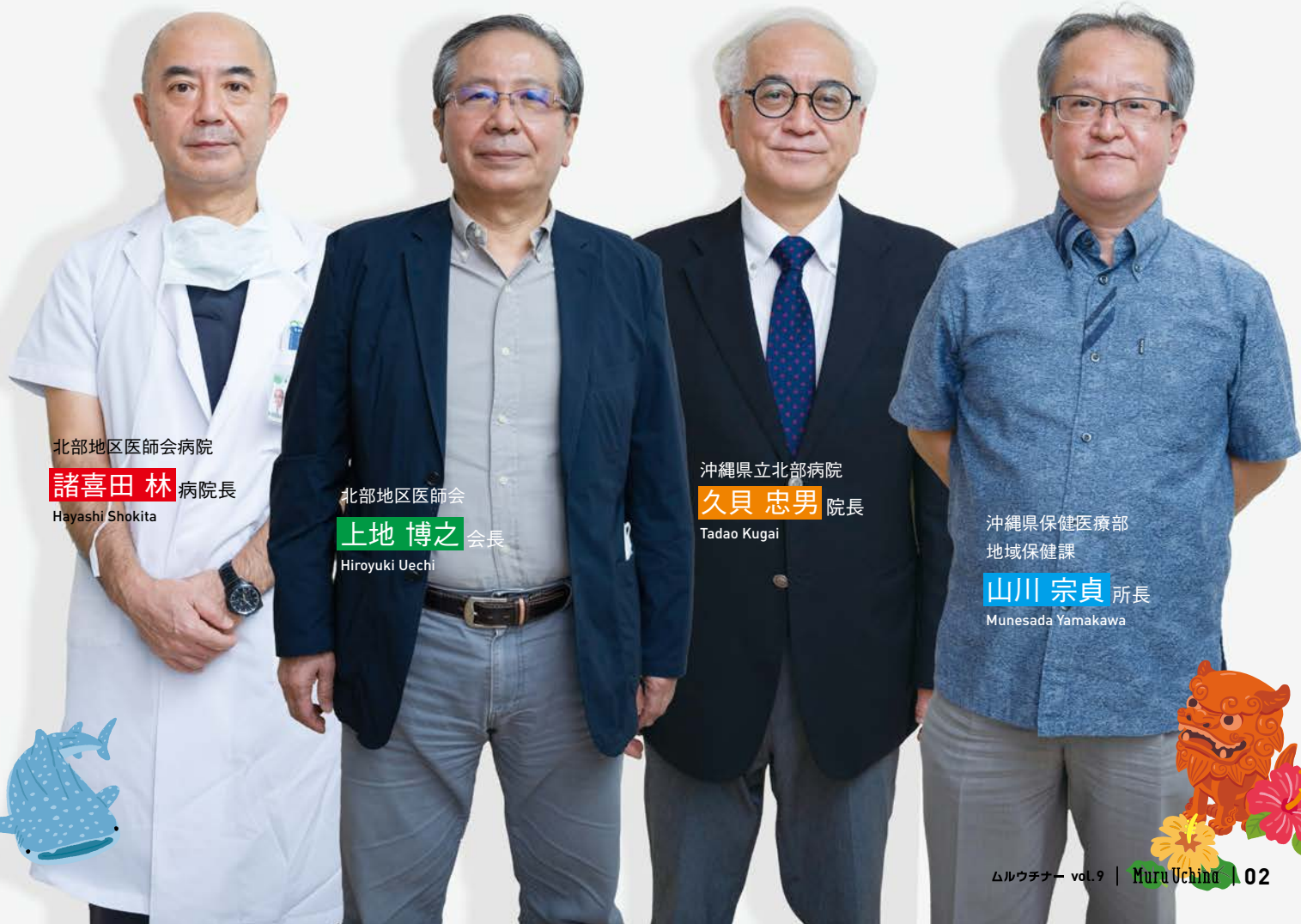
そのような状況のなか、沖縄県北部地域では

新型コロナウイルス感染症拡大の波をどう乗り越えてきたのか。

沖縄県北部保健所の山川所長、北部地区医師会の上地会長、沖縄県立北部病院の久貝院長、

北部地区医師会病院の諸喜田病院長による座談会を開催し、

沖縄県北部地域の新型コロナウイルス感染症対策の先進的な取り組みを紹介します。



北部地区医師会病院

諸喜田 林 病院長
Hayashi Shokita

北部地区医師会

上地 博之 会長
Hiroyuki Uechi

沖縄県立北部病院

久貝 忠男 院長
Tadao Kugai

沖縄県保健医療部
地域保健課

山川 宗貞 所長
Munesada Yamakawa



01

各機関との有機的な連携で 重症化防止を徹底する



諸喜田病院長…沖縄県北部地域には急性期病院が医師会病院（北部地区医師会病院）と北部病院（沖縄県立北部病院）の2つしかありません。医療資源が乏しい地域だからこそ各機関の連携を密にして協力し合わなければ、新型コロナウイルス感染症の波を乗り切ることができないというのが北部地域における感染症対策のスタートでした。

（Web会議）をしたことが大きかったと思います。

検査と陽性者外来、入院治療という役割に集中しながら、4機関が有機的に連携してスムーズに対応にあたることができました。

早期に対応することで重症化を抑え、医療ひっ迫を防ぐことができる。感染者の対応としては、とにかく早期に治療介入していくことを北部地域では徹底しました。

し、医師会の先生方の輪番制によって対応しました。これにより陽性患者さんの拾い上げがしかりできたと思います。

上地会長…連携会議には実際に新型コロナウイルス感染症を担当している先生や救急の先生、さらに県庁に勤務する先生も参加し、沖縄県全体の状況を教えていただくなど限なく情報を共有できたことで、各機関ができること、やらなくてはいけないことなど、役割分担が自ずと明確になりましたよ。

久貝院長…保健所は疫学調査、医師会は発熱外来、PCR検査、ワクチン接種の促進、2病院は行政

山川所長…保健所の役割としては疫学調査によって感染拡大防止を図ることです。介護施設でクラスターが発生した際は基本的に保健所が介入するのですが、2病院の先生が介護施設に行っ

山川所長…そのためには陽性患者さんをいかに早く拾い上げることが重要な課題でしたよね。

山川所長…最初のころは「熱が出たけど、どこに行ったらいいんだ」という相談が保健所にすぐ来ていたんです。「北部地域発熱相談センター」の設置以降は発熱時にどこに行けばいいのか、患者さんが迷うことはなくなりました。

上地会長…発熱患者さんは真っ先に近くのクリニックに駆け込みます。イタリアでは多くの医師たちが感染して亡くなりましたし、当初はマスクや防護服などが不足しており、我々開業医は戦々恐々でした。個々のクリニックで対応するのは厳しく、4機関が早急に話し合って2020年4月には北部病院の敷地内に「北部地域発熱相談センター」を設置

上地会長…発熱患者さんは真っ先に近くのクリニックに駆け込みます。イタリアでは多くの医師たちが感染して亡くなりましたし、当初はマスクや防護服などが不足しており、我々開業医は戦々恐々でした。個々のクリニックで対応するのは厳しく、4機関が早急に話し合って2020年4月には北部病院の敷地内に「北部地域発熱相談センター」を設置

上地会長…発熱患者さんは真っ先に近くのクリニックに駆け込みます。イタリアでは多くの医師たちが感染して亡くなりましたし、当初はマスクや防護服などが不足しており、我々開業医は戦々恐々でした。個々のクリニックで対応するのは厳しく、4機関が早急に話し合って2020年4月には北部病院の敷地内に「北部地域発熱相談センター」を設置

上地会長…発熱患者さんは真っ先に近くのクリニックに駆け込みます。イタリアでは多くの医師たちが感染して亡くなりましたし、当初はマスクや防護服などが不足しており、我々開業医は戦々恐々でした。個々のクリニックで対応するのは厳しく、4機関が早急に話し合って2020年4月には北部病院の敷地内に「北部地域発熱相談センター」を設置

上地会長…発熱患者さんは真っ先に近くのクリニックに駆け込みます。イタリアでは多くの医師たちが感染して亡くなりましたし、当初はマスクや防護服などが不足しており、我々開業医は戦々恐々でした。個々のクリニックで対応するのは厳しく、4機関が早急に話し合って2020年4月には北部病院の敷地内に「北部地域発熱相談センター」を設置

山川所長…そうですね。2病院と医師会、そして保健所の適切な連携を実現できたのは、毎週月曜日や必要に応じて、各機関の代表者や先生方が参加して連携会議

久貝院長…保健所は疫学調査、医師会は発熱外来、PCR検査、ワクチン接種の促進、2病院は行政

久貝院長…2病院は治療を担ったのですが、北部地域は医療資源が乏しいため重症者が増えればあつという間に医療ひっ迫となり地域医療が崩壊してしまいます。感染患者さんが増えても

久貝院長…2病院は治療を担ったのですが、北部地域は医療資源が乏しいため重症者が増えればあつという間に医療ひっ迫となり地域医療が崩壊してしまいます。感染患者さんが増えても

久貝院長…唾液検体も可能になったことで今度は検査の迅速化を目指して「北部地域発熱相談センター」を「北部地域PCR検体採取センター」として運用変更し、検査にシフトしていった。このタイミングも非常に良かったです。迅速な検査によって早期発見・対応ができました。

02

医師が必ず陽性者を診察し 早期にリスクを見極める

山川所長…北部地域における感染症対策の取り組みとして先進的なのは、他の地域はPCR検査をして陽性だったら医師ではない担当者の聞き取りで受診や療養先を判断していますが、北部地域では必ず医師が陽性者を診察し、入院かホテル療養か自宅療養かを判断したことです。

諸喜田病院長…2病院の医師が「陽性者外来」にて直接診察したことで、早めにリスクを見極めることができ、重症化防止につながることができましたよね。それと、新型コロナウイルス感染症は病状が急変することもありますから、医師会の先生方にも協力していただき、自宅療養の場合にも、医師が毎日電話で健康状態を確認したり、ホテル療養の方には回診をして病状を把握していました。

久貝院長…医師による聞き取り

や回診によって、自宅療養やホテル療養から入院になった患者さんもいます。重症化になる前に適切な治療ができたことで、北部地域では自宅療養で亡くなった患者さんは一人もいません。

諸喜田病院長…陽性患者さんは北部病院か医師会病院を必ず受診しています。ホテルや在宅療養時に体調が悪くなっても、ファーストタッチをした病院に行くという取り決めがあるため、スムーズな対応ができましたし、患者さんやご家族の安心にもつながりました。

上地会長…今回の新型コロナウイルス感染症対策で、改めて各機関との連携、チームワークが大切であることを実感しましたよね。我々開業医は2病院に負担をかけるまいよう、ワクチン接種の促進にも中心となって対応し、開業医の先生方に協力してもらい土日

も欠かさず接種を実施しました。アレルギー症状のある人は北部病院で引き受けていただくなど、密な連携とチームワークによってワクチン接種もスムーズに進みました。

久貝院長…そうですね。4機関が胸襟を開いて情報や意見交換をし、お互いの役割、仕事内容、状況を把握できたことは大きかったですよね。それに院内連携もすっかりできた。感染者さんが増加すると、内科だけではなく他科の医師たちもほとんど診療に参入しました。「チームでなら大きな波に立ち向かうことができるはず」と、病院スタッフの一体感も凄かったです。

諸喜田病院長…医師会病院でも、外科など他科の先生方も行政検査や外来に積極的に協力していました。病理の先生も手伝ったというところで検査に参加してもらったなど、強い一体感が生まれましたね。

山川所長…2009年の新型イ

ンフルエンザのときも大変でしたが、そのときはタミフルなどの治療薬があった。今回の新型コロナウイルス感染症は予防接種もなく治療薬もない状況から最善の対策、対応、診療を積み上げていった。この経験は次に新しい感染症が出てきた際に大いに活かされると感じています。





北部地区医師会
上地 博之 会長
Hiroyuki Uechi

久貝院長：今回の新型コロナウイルス感染症の診療では、総合内科や総合診療がクローズアップされました。生活習慣病をもっている場合には重症化しやすい、受診控えにより持病が悪化した患者さんがいたり、医師として幅広い学びを得られたので

諸喜田病院長：研修医の先生方には陽性者外来のサポートをしてもらうなど、他の医師たちと同じように感染症対応の貴重な経験ができたと思います。

久貝院長：研修医の先生方にもPCR検査における検体の採取や、挿管の手伝い、PPE着脱などを経験し、感染症対応をしっかり学べたのだと思います。北部地域は医師数が少ないので、自然と役割が回ってくるんですよ。ワクチン接種時の問診などは研修医の先生方が積極的に対応していました。



03

沖縄県北部地域の医療には大きな希望と可能性がある

はと思います。

山川所長：北部地域では2つの急性期病院しかなく、医師数も少ないこともあり、普段から多彩な患者さんを診ることが出来ますよね。

久貝院長：北部地域の2病院は少数精鋭であり、北米型ERを実践し、多彩で豊富な症例に触れることができます。医師会病院は琉球大学の関連病院であるためアカデミックや専門性を高めたい先生は琉球大学での研修が可能など、進路にも柔軟に対応す



北部地区医師会病院
諸喜田 林 病院長
Hayashi Shokita

ることができます。

上地会長：離島医療も在宅医療も経験できますし、各医療機関の連携が密なので何かあった時に気軽に相談に乗ってくれる先生が多く、安心して医療に臨める環境もいいですよ。

久貝院長：フォロー体制もしっかりしています。離島診療所で陽性患者さんが発生したときは、一人医師で大変だったと思いますが、テレビ電話で相談に乗ったり、離島に直接行ってフォローし、診療所に急遽ゾーニングをつくるなどして対応しました。北部地域は離島医療も身近であり、今後ますますニーズの高まる総合診療の素地を養える最適な環境にあります。

諸喜田病院長：北部病院と医師会病院を統合する「北部基幹病院構想」(2026年に公立沖縄北部医療センターとして開設予定)が進んでいるのですが、統合された新たな病院では総合診療の役割が大きくなるはずですよ。ICT化など先進的なトライア

ルができる病院を目指していますし、県立病院と琉球大学の文化をミックスした新しい医療のカタチを作れたらと思います。北部地域の医療は全国で展開されている地域医療構想の理想的なコンパクトモデルになるでしょう。

上地会長：これからの北部地域の医療には大きな希望と可能性がありますよね。風光明媚で美しい自然が多く残された魅力的な地域ですし、生活環境も抜群に良く、若い先生方にとって「住んで良し、働いて良し」の最高の環境だと思います。

山川所長：北部地域は普段から保健所と医師会と病院が有機的につながっており、お互いの顔が見える関係なので非常に仕事しやすいことも魅力ですよ。

久貝院長：沖縄県の北部地域が研修や医師教育の新しいメッカになるのだと思います。

諸喜田病院長：これからの北部地域の医療にぜひ期待していただきたいと思います。



Interviewee

藤田 次郎 教授
Jiro Fujita

Title

琉球大学病院
感染症・呼吸器・消化器内科学講座(第一内科)

Data

〒903-0215
沖縄県中頭郡西原町字上原207
TEL: 098-895-1144
<https://www.ryukyu-med1.com/>



Special Interview

沖縄で長く培われてきた 感染症・総合診療の土台と 強固なチーム医療

新型コロナウイルス感染症における重症患者の診療を担ってきた
琉球大学病院 第一内科(感染症・呼吸器・消化器内科)の教授であり、
沖縄県新型コロナウイルス感染症対策専門家会議の座長も務めている
感染症・呼吸器のエキスパート、藤田次郎先生が語る
沖縄県の新型コロナウイルス感染症対策と若い医師たちに送るメッセージ。

沖縄県では、2009年の新型インフルエンザにおいて県民の6分の1に当たる約22万人が感染し、3名が亡くなった。今般の新型コロナウイルス感染症では約5万人が感染したが、実に400名近くの人々が亡くなっている。

「同じ感染症でも、2009年より130倍もの強烈なインパクトがありました」

新型コロナウイルス感染症は、感染症・呼吸器のエキスパートであり、40年という豊富な診療経験をもつ藤田次郎先生にも大きな衝撃を与えた。

琉球大学病院では感染症指定医療機関として、県立南部医療センター・こども医療センター、県立中部病院と共に、人工呼吸器を必要とするような重症患者に対応してきた。琉球大学の第一内科は感染症・呼吸器・消化器内科を専門としており、藤田先生いわく、「まさにコロナ感染症にぴったつとはまった診療科」であり、第一内科の医師が主治医となりこれまで約440例の新型コロナウイルス感染症の重症患者に対応してきた。さらに、県内で

連携とチームワークと助け合いの精神で

重症の感染妊婦を受け入れられるのは大学病院と県立中部病院であつたため、第一内科では3人の出産にも携わつた。

「一人は救急外来で生まれ、一人は内科病棟で生まれ、もう一人は周産期センターでオベ室に移動する途中で生まれました。母子共健康に家に帰ることができて本当に良かったです」

第一内科では他の感染症や、呼吸器、消化器内科の患者にも対応しなければならない。それでも、新型コロナウイルス感染症拡大の波を乗り越えられたのは、沖縄の医療に感染症や総合診療、そしてチームワークの強固な土台があつたからだと藤田先生はいう。

「沖縄の医療はアメリカ式の医療を取り入れた県立中部病院を中心に発展してきました。アメリカでは、日本のように感染症を泌尿器科や呼吸器内科が診るのではなく、感染症科が独立している。県立中部病院にも感染症内科が独立してあり、そこで学んだ多くの医師たちが県内のいろんな病院で活躍しています」

さらに本土と海で隔てられ、医療資源に限りのある沖縄県で

医療を完結させるためには、どんな疾患であつても診る必要がある。

「第一内科だけで重症患者は対応できませんでした。沖縄県の重点医療機関、研修病院にも献身的に重症の感染症患者さんを診てもらいました。総合診療とチームワークと助け合いの精神が沖縄の医療に根付いていたからこそ、感染拡大の波を乗り越えることができたんです」

北部地域における、陽性者を必ず診察して重症化防止を成功させた取り組みも、「人口比率などのバランスによってできた要因もありますが、根底に各機関の密な連携と、強いチームワークがあつたからこそ成功したのでは」と評価した。

コロナ禍での診療の日々を、「医師の負担は想像以上に大きく、疲れ切りましたね」と藤田先生は気持ちを吐露した。しかし、新型コロナウイルス感染症を経験して得たものは、多くの医師にとって新たな強みとなったはずだ。

「この感染症は実際に

経験したからこそ本質がわかる 経験が医師の強みとなる

診た医師でないと本質はわからないんです」

流行初期、専門機関は「マスクは必要ない」「暖かくなれば終息する」といつていた。誰一人、専門家は居らず、全員が素人だった。藤田先生は当初、メディアの取材を全て断つていたという。なぜなら自分が専門家とは思えなかつたからだ。

「私のなかに、100例診たら専門家だと名乗っていいという基準があるんです」

未経験者と経験者の差はとてつもなく大きい。沖縄県では人口あたりの感染者率が高く、多くの研修医や若手医師たちも新型コロナウイルス感染症の診療を経験してきた。

近年、新たな感染症が次々と猛威を振るっている。2003年のSARS、2009年の新型インフルエンザ、2010年のMERS、そして2020年の新型コロナウイルス感染症。数年後、新たな感染症が襲ってくるだろう。そのときどうするか。

経験者は強い。沖縄県の医師たちが疲労困憊のなかでも手に入れた経験が大いに活かされるはずだ。



Profile

香川県出身。岡山大学医学部卒業。虎の門病院内科、国立がんセンター病院内科レジデントの後、1985年に米国・ネブラスカ医科大学呼吸器内科へ留学。帰国後、香川医科大学附属病院第1内科助手、講師を経て、2005年に琉球大学医学部第一内科(感染症・呼吸器・消化器内科)教授に就任。2007年に琉球大学医学部副学部長、2015年4月から2019年4月まで琉球大学病院の病院長も務める。



Sunset of the Island

沖縄ドクター物語



コウスケとはリモートでよく会議するから久しぶり感はないよ……

今日は伊是名村に来られなくて残念だったね……

石垣カンタ

琉球大学医学部を卒業後、沖縄県立中部病院の総合診療専門医コースにて初期研修。その後、同病院の総合診療科専門研修プログラムに参加。専門研修3年目の2020年4月より沖縄県立北部病院附属伊是名診療所に赴任。



みんなつながった！
ヤッホー

久しぶりに同期の仲間に会いたくなってさあ！
今日はカンタ君のいる島に行く予定が中止になって……

山川コウスケ

琉球大学医学部を卒業後、琉球大学病院で初期研修を修了し、琉球大学病院第一内科に入局。2020年9月から北部地区医師会病院の呼吸器・感染症科に赴任。専門分野は感染症。



ごめん遅くなって！
急にリモート飲み会しようだななんてコウスケ君どうしたの？

知念マリ子

琉球大学医学部卒業後、琉球大学病院で初期研修を修了し、同病院で産婦人科の専門研修も行う。周産期やがん医療など産婦人科領域を幅広く研鑽中。



軽石漂着でフェリーが欠航になってしまい伊是名村に行けなかったコウスケ。



えっ!? もう流行ってないの?

リモート飲み会やってる人ってまだいるんだね笑

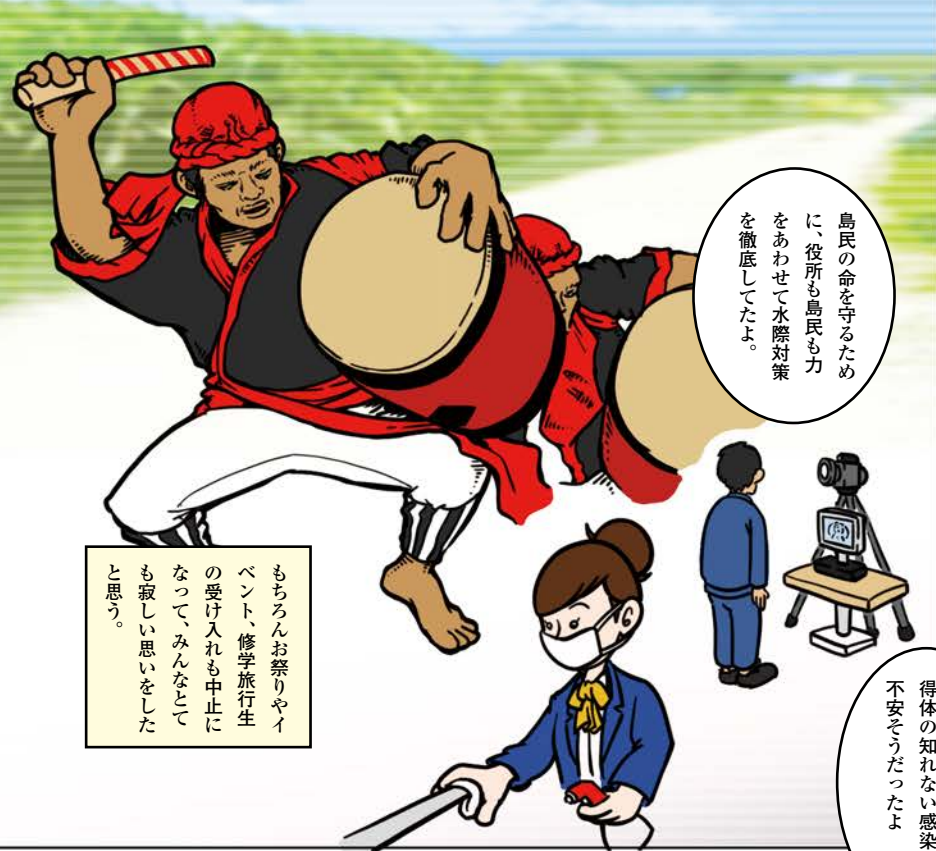


島料理が食べたかったあ……

本当に大変な時代だよ……



コロナ第5波が落ちついたと思ったら次は軽石問題かあ



もちろんお祭りやイベント、修学旅行生の受け入れも中止になって、みんなとても寂しい思いをしたと思う。



コロナ陽性者の妊婦さんが切迫早産で救急搬送されてきた症例が3件あって……。

3件とも危険な状況のなか、救急、感染症の専門医の指示のもと、無事に赤ちゃんが生まれて……



妊婦さんや赤ちゃんの命にも影響を及ぼすこの感染症は改めて恐怖を感じるねえ。



研修医の初期研修にも影響はある？後輩たちは元気にしてる？



医療従事者はもちろん、コロナ患者に直接対応している研修医の先生たちは、慣れないなかで精神的にも体力的にも特に大変だったと思う。



救急患者が減った分、レクチャーに時間を割いて、みんな熱心に研鑽しているよ。



うちの病院でも、コロナ禍という環境で、研修医が何をしたら貢献できるのかを自分で考えて、前線で大活躍しているよ。

そっかあ。この環境で多くのことを吸収し、医師として成長しているんだね。



言ってなかったっけ？

そう言えば、コウスケ君ってなんで感染症を専門に選んだの？



初期研修の地域医療研修で
石垣島に行った時……

ゆっくり？
遊べるかな？笑

地域医療研修スタートと
同時に八重山圏内で1名
の麻しん患者が発生した。
麻しんは感染力が強く、乳
児がかかった場合、重篤な
後遺症や死に至るケー
スもある。

この集団接種を働き
かけた感染症内科医
の先生の影響で感染
症に興味を持ち感染
症の道に進むことを
決めたんだ。

石垣市は麻しんの
まん延を防ぐた
め、どこよりも先
に任意の集団予防
接種を乳児に実施
した。

石垣島は外国から
の旅行者が大型ク
ルーズ船でも多く
訪れ、洋上救急の
頻度や感染症が持
ちこまれるリスク
が高まっていた。

SARS、新型インフルエン
ザ、MERSのように新たな
感染症がいつ流行してもお
かしくない。沖縄で感染症を
学ぶことは次に新しい感染
症が出てきたときに大いに
活かされると思うよ！

お兄ちゃん！
すごい

ユータ先生の話はま
るで現在のコロナ禍
のような状態を想定
していたかのような
発言が多かった。

僕、沖縄で
感染症の
専門の道に
進みたいです

コロナ禍に限らず感染症
の知識が未来の日本・沖縄
の島民の命にとっていか
に大切かをユータ先生に
教えてもらい専門の道に
進むことに決めたんだ！

TOKYO
OLYMPICS

東京オリンピックは各国
の感染症の交流にもなる
し、日本はグローバル化が
進んでいて、僕たちもそれ
に対応できるように変わ
らなければいけないんだ！

感染症内科の役割はこ
れからの日本にとって
とても重要だし、ここ
沖縄の島民を守るため
にはやるべき課題がた
くさんあるんだ！

その先生の名前は……
知念ユータ先生
そう！ マリ子ちゃんのお兄さん！
ちなみに当時のユータ先生は
今の僕たちと同じ歳だった。

お兄ちゃん！

たまには
リモートもいいね！
ゆっくり話せて

島医者はコロナ
禍の前からリモ
ート飲み会が盛ん
だったって

お互いこれからも
頑張っていこう！

今日はみんなありがとう！

DOCTORS
SCENE #1

～ やんばるで働く医師の話 ～

in 北部地区医師会病院

一人ひとりが「何をすべきか」を考え
一枚岩で新型コロナに立ち向かう

北部地区医師会病院

呼吸器・感染症科 科長、医療連携統括部長

田里 大輔 先生 Daisuke Tasato

【出身地】沖縄県那覇市 【出身大学】琉球大学医学部(2003年卒)

Profile

大学卒業後、琉球大学病院の第一内科へ入局。同大学病院や関連病院の浦添総合病院、中頭病院、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターで一般内科、呼吸器、感染症の研鑽を積む。2008年に国立国際医療センターエイズ治療・研究開発センター、2009年より再び琉球大学病院の第一内科、2013年に北部地区医師会病院に赴任。専門分野は呼吸器内科、感染症。



北部地区医師会病院

DOCTORS SCENE

呼吸器内科と感染症を専門とする田里大輔先生は、院内感染対策チーム（ICCT）のリーダーとして北部地区医師会病院（以降、医師会病院）における新型コロナウイルスウィルス感染症対策を牽引してきた。座右の銘は、「偶然」は準備のないものには微笑まない。先が見えないからこそ、どんな変化にも対応できるように準備を整えておく。新型コロナウイルスウィルス感染症はまさにそれだった。北部地域には急性期病院は2つしかなく医療資源は限られている。指定感染症はまずは公的病院が対応するため、北部地域では新型コロナウイルスの患者は県立北部病院に集約されることになっていった。しかし、田里先生は「すぐに感染者が増え、医師会病院でも受け入れる必要が出てくる」と考え、2020年2月という早い段階で全職員を対象とした新型コロナウイルスに関する院内研修会を実施するなど準備を整えてきた。

「新型コロナウイルスの患者を含め、クリニックなどで対応できない患者は自ずと2病院を受診する。その場しのぎの対応では、地域に必要な医療体制を維持できなくなることには目に見えていたんです。北部地域では、重症者が増え、かつ他の医療圏に患者を搬送できなくなった場合にはすぐに医療崩壊してしまつたため、軽症者も含め感染者全員を必ず2病院で診る」という初期対応を徹底し、重症患者の発生を最小限にする戦略を取った。また、濃厚接触者を同定する疫学調査とその後の行政検査、陽性判明後の受診先の調整は保健所が担当するが、北部地域では、行政検査と受診については2病院が迅速に対応したため、保健所は疫学調査に集中することができた。連携によって各機関が担うべきタスクに集中する体制を速やかに整えたことも重症患者の発生を防いだ大きな要因だと田里先生は語った。「北部地域には2病院しかないからこそ、『ここは頑張れる』『こうなると厳しい』ことがお互いにわかっている。感染拡大の初期段階でしっかり情報を共有して、足並みを揃え、先手先手で対応したことで医療ひっ迫を防ぐことができました」。流行初期の感染者が少ない時期は、マスクなど医療物資にも限りがあったことから呼吸器・感染症科の医師のみで対応するなど集約化を原則としていた。しかし感染者数が増えた第3波では他の内科医師の協力

各診療科と多職種連携
による総力戦で対応

を、第4、5波では全ての診療科の医師や多職種による総力戦が必須となった。「他科の先生方に業務の負担や感染リスクを負わせないよう、その都度マニュアルを作成し、患者さんとはオンラインでモニター越しに接するなど診療環境を整備しました。また、内科医がトリアージ（重症度とそれに応じた治療方針や療養先の決定）を行った後の患者さんへの説明は、他科の先生に対応してもらいました」

医師会病院の医局は全科一つにまとまっており、各診療科間、他職種との風通しは非常に良い。さらに田里先生は医療連携統括部長として、医師会病院と県立北部病院を統合してできる「公立沖縄北部医療センター」の連携調整も担当しており、普段から院内の各部署とコミュニケーションを密に取っていたことで、他科や他職種への協力依頼もスムーズにできたという。

「新型コロナウイルス感染症の対策が上手くいったのは、スタッフ一人ひとりが何ができるか、何をすべきかを考え、普段からの風通しの良い多職種連携によって、みな一枚岩となつて立ち向かうことができたからなんです」と、田里先生は大きく胸を張った。



短期間で診療の進歩を体感した、貴重な経験に

北部地区医師会病院 呼吸器・感染症科 日暮 悠璃 先生 Yuri Higure

〔出身地〕東京都 〔出身大学〕琉球大学医学部地域枠(2016年卒)

日暮悠璃先生は現在卒業6年目。琉球大学病院の第一内科(感染症、呼吸器、消化器内科)に所属し、2021年6月から北部地区医師会病院(以降、医師会病院)の呼吸器・感染症科に赴任した。

琉球大学病院にいたときは新型コロナウイルス感染症の流行初期だった。

琉球大学病院では重症患者の診療を中心に携わっていた日暮先生だが、医師会病院に赴任した時期は第5波という大きな波が襲い、発熱患者が次々と訪れる状況だった。

「当院に赴任してからずっと忙しかったですね。第5波のときは帰りが22時を過ぎることも多かったです。外来で感染患者さんが一日30人、入院も一時期は最大60人を超えるなど大変でしたが、流行初期には助からなかっただろうなという患者さんがほとんど助かるようになって、短期間で診療の進歩を体感できた貴重な経験となりました」

日暮先生は新型コロナウイルス感染症を経験したことで身に染みて感じていることがある。それはコロナ禍の外出自粛による

感染症対策と一般診療の両立が今後の課題

受診控えによって、健康リスクが高まってしまったことだ。実際、感染拡大が落ち着いた2021年10月に、肺がん受診の患者が急増したという。「コロナ禍による受診控えで、8、9月には新規の肺がん患者さんはあまりいませんでしたが、10月になって肺がん患者さんの受診が増え、しかも末期の方が多かった。感染対策と他の診療をどう両立させていくのが今後の大きな課題だと感じました」

北部地域には呼吸器外科がないため、肺がんの治療は域外の病院との連携が必須であり、患者を琉球大学病院や中頭病院などに送ることも多いが、北部地域の医療状況はしっかり認知されているため、コンサルトもしやすく、患者を送る際も非常にスムーズな体制が構築されている。

日暮先生が医師会病院に赴任して学んだことがある。それはマネジメント能力だ。

「北部地域の患者さんは漁師や農業を営んでいる高齢の方が多く、診療時に『牛を飼っているの、も

う帰らせてほしい』といわれたこともあります。その患者さんにとって最善の治療を提供するには、医学的なことだけではなく生活背景も考慮する必要があることを学びました」

北部地域の診療には、患者や家族の要望、経済的要素、生活環境や社会的背景などさまざまな要素がある。それらを総合して診るためにはコミュニケーション力や調整力など、マネジメント能力も必要だ。

「もちろん病気を治すということとは大事ですが、それと同じくらい患者さんが安心して納得できることも大事だと感じました。患者さんが納得し、協力してくれることで最善の治療が可能となるんです」

日暮先生は流行初期から新型コロナウイルス感染症と対峙してきた。この短期間で内科医としてのスキルアップだけではなく、北部地域の診療を経験したことで新たな考えや価値観を吸収し、医師としての幅を大きく広げた。日暮先生の始終優しい表情のなかで、ときどき光る力強い眼差しに医師としての自信が垣間見えた。

マネジメント力を学んだ北部地域での診療経験

Profile

琉球大学医学部に地域枠として入学。卒業後は沖縄赤十字病院にて初期臨床研修。琉球大学病院第一内科に入局。沖縄赤十字病院、琉球大学病院の勤務を経て、2021年6月から北部地区医師会病院の呼吸器・感染症科に赴任。専門分野は呼吸器内科。



感染症という負荷のある経験が 外科医としての大きな成長に

北部地区医師会病院 消化器外科 仲本 正哉 先生 Masaya Nakamoto

〔出身地〕沖縄県那覇市 〔出身大学〕琉球大学医学部地域枠(2016年卒)



外科も参加した総力戦で 感染症の波を乗り切る

「コロナ禍による受診控えの影響で手術が増えてきたんですよね」
時刻は17時過ぎ。額にはフェイスシールドを外した跡がついていた。朝の9時から夕方まで手術に携わっていたその表情に疲労感は見えなかった。2021年4月に北部地区医師会病院(以降、医師会病院)の消化器外科に赴任した卒業6年目の仲本正哉先生だ。

医師会病院では、呼吸器・感染症科以外の医師も新型コロナウイルス感染症の診療に加わり、外科医である仲本先生も、行政検査や陽性患者の問診に携わるなど、総力戦で第5波の危機的状況を乗り切った。

「呼吸器・感染症科の先生方が新型コロナウイルスの患者さんのトリアージや入院を担当するのですが、外科医では細かい対応が難しく、行政検査や陽性患者さんへの問診、説明などでフォローしました。総力戦で対応しなければ第5波は乗り越えられない状況であり、病院全体に一体感がありました」

陽性患者の問診や説明は、オン

ラインによるモニター越しで対応したため感染リスクなどの負担もなく安心して携わることができたという。

「リスクもなく安心して問診や説明ができました。コロナ禍で手術も少なくなっていた時期でしたし外科医として検査や問診に携わることは全然負担ではありませんでした。むしろコミュニケーション力を学ぶ絶好の機会になったと感じています」

外科医としては感染症患者の緊急手術も経験した。

「前にいた病院でも手術患者さんが陽性の可能性もあるため、感染対策を徹底して手術に臨んでいましたが、ここでは既に陽性だとわかっていて患者さんの緊急手術に携わりました。正直、怖さもありましたが、とてもいい経験になりましたね。誰にも感染することなく無事に手術を終えることができて良かったです」

北部地域には急性期病院が2つしかなく、ほとんどの患者が2病院に集まるため経験できる症例数は多い。外科医も少ないため、研修医や若手医師も積極的に手術に携われることが特徴だ。

「外科医の能力として大切な手術スキルの獲得には、経験数を積み上げていくことが重要です。しかも新型コロナウイルス感染症という普段とは異なる負荷を与えられながらの手術は貴重な経験になりました。医師会病院に赴任して外科医として一回り大きくなったと感じています」

普段では経験できない 貴重な学びを得る

新型コロナウイルス感染症によって、普段なら経験できない新たな学びを得た仲本先生。長時間の手術を終えたばかりの表情には清々しい達成感が表れていた。

「手を動かしながら最善のアプローチを考える。外科医はそれが楽しいんですよ。今日は朝9時から夕方までずっと手術に入っていました。全然苦じゃないです。楽しいことは、あつという間に時間が過ぎてしまいますから」と、仲本先生は充実した笑顔を見せた。



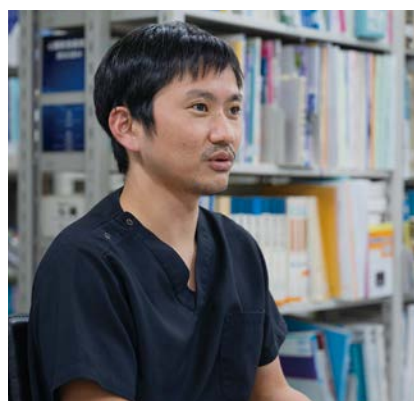
北部地区医師会病院

Hospital Data

公益社団法人北部地区医師会 北部地区医師会病院
〒905-8611 沖縄県名護市字宇茂佐1712-3 TEL:0980-54-1111 <https://hokubuishikai.com/>

Profile

琉球大学医学部に地域枠として入学。大学卒業後は、ハートライフ病院にて初期臨床研修。同病院にて外科専攻医。琉球大学病院の外科医局と地域枠の義務の一環で2021年4月より北部地区医師会病院の消化器外科に赴任。専門分野は消化器一般外科。



DOCTORS
SCENE #2

～ やんばるで働く医師の話 ～

in 沖縄県立北部病院

“医療の基本に忠実な対応”で
コロナ感染症に挑む

沖縄県立北部病院 救命救急科 部長

高良 剛 ロベルト 先生

Tsuyoshi Robert Takara

[出身地] 沖縄県うるま市

[出身大学] 自治医科大学(1994年卒)

Profile

大学卒業後、沖縄県立中部病院にて研修。北大東診療所(3年間)、西表西部診療所(2年間)など離島医療に従事した後、沖縄県立中部病院の救急科に赴任。2018年に沖縄県立宮古病院の救急科、2019年に沖縄県立北部病院 救命救急科の部長。専門分野は救命救急。



沖縄県立北部病院(以降、北部病院)の救命救急科は、北部地区や離島における救急センターとしての機能を担い、ER型救急として24時間体制である。急性疾患、外傷に対応し、多い日は100名を超える救急受診がある。

救急は、あらゆる病気の最前線に位置するため新型コロナウイルス感染症の影響も真っ先に受けやすい。救命救急科を牽引する高良剛ロベルト先生はいう。

「感染対策により、救急診療に制限がかかったり、受診控えがあったり、今まで通りの救急受け入れができなくなるなど、状況はがらっと変わりました。感染対策徹底のためにハードもソフトも作り変える必要があり、その準備も大変でしたね」

沖縄県では新型コロナウイルス感染症対策において、救急病院ではコロナによる飛び込み患者の対応を県本部が一括して受診調整をしていたが、北部地域は医療資源が少なく、重症患者を受け入れる余裕がないことから、早期治療による重症化防止のため発熱患者を積極的に受け入れた。

全ての患者に直接対応し
災害レベルを回避

「北部地域では、感染症の疑いがあったとしても、患者さんが来たら診察する」という医療の基本に忠実な対応をしたんです。そこにブレーキをかけずに、とにかく早期対応を徹底した。陽性患者さんに直接対応した内科の先生方は特に大変だったと思います。みんな受け入れもストップすることなく、災害レベルに至りませんでした」

軽症から重症までどんな症例にも対応し、急性疾患とコモンディーズを余すことなく経験できる北部病院の救命救急科では、初期治療のスキルや専門科へのコンサルトなど、適切で迅速な判断力を養うことができる。研修医や若手医師の教育の場としても魅力ある環境だが、新型コロナウイルス感染症によって研修教育への支障や変化はあったのだろうか。

「感染が拡大するにつれ研修医の先生方では対応できないことが徐々に増え、受診控えにより救急患者さんも減りました。その分、レクチャーに時間を割

北部病院の医療には
“医の根本”がある

くなど、なんとか研修の質を下げないようにしました」

新型コロナウイルス感染症の実態や対応がわかるにつれ、研修医も率先してPCR検査や発熱患者に対峙し、普段とは異なる診療を実践的に学んだ。

高良先生は北部病院の特徴をこう語る。

「大きな病院では患者さんが病院に来た瞬間、普段の生活から切り離されて、病気の人になる。地域に密着している北部病院では、患者さんが抱える問題に何でも相談に乗ります。患者さんの背景が見えやすく、この人が家に帰ったらどうなるか、その後の生活まで診るという修練を自然と積むことができるんです」

一人ひとりが抱えている問題に何でも相談に乗り、どんな症例であっても診る。これが北部病院の医師たち全員の姿勢であり、「医の根本なんですよね」と高良先生はいう。

北部病院の医師たちにとって、新型コロナウイルス感染症に対峙したことは特別なことではなく、普段から実践している医療人として当たり前の対応をしてきたに過ぎないのだ。

感染症診療と感染対策で ホスピタリストとしての実力を獲得

沖縄県立北部病院 内科 永田 恵蔵 先生 Keizo Nagata

〔出身地〕鹿児島県 〔出身大学〕鹿児島大学医学部(2012年卒)



永田恵蔵先生は、沖縄県立北部病院(以降、北部病院)における新型コロナウイルス感染症対策の中心的役割を担った医師だ。診療はもちろん、感染対策や診療体制などの組織作りも牽引した。

北部地域では、重症化防止のため陽性患者は全員

必ず診療することを徹底し、北部病院でも発熱患者全てに対応した。2021年8、9月の第5波では小児の軽症患者は直接診なかったが、必ず医師が電話で状態を確認をした。

「全てに対応することで、体調の変化があればいつでも病院に来ることができるよう、緊急時のアクセスをしっかりと確保しました」

永田先生は北部地域における感染対策や院内の医療提供体制の整備をするため、保健所や医師会、北部地区医師会病院との組織連携や院内の多職種連携の調整にも奔走した。

診療だけでなく 連携調整にも携わる

「保健所とは初めて関わりましたし、医師会病院の先生方や普段は書面でやりとりするクリニックの先生方ともたくさん話せました。さらに沖縄県の対策本部にも参加し、県全体の医療状況も知ることができました。診療以外にも多くのことを学びましたね」

北部病院では、普段から北部地域の重症患者やクリニックからの紹介患者など難しい症例を診ることが多い。医師数が少ないため内科の医師が外科や整形外科など他科の患者を診ることもある。さらに永田先生は卒業6年目で北部病院に赴任したが、翌年には医局長に抜擢されたという。北部病院には実力があれば若手医師にも責任が与えられ活躍できる環境がある。

「幅広い症例をたくさん経験し、医局長として組織や地域にどう貢献できるかを考える機会が与えられ、新型コロナウイルス感染症によって地域連携や多職種連携を学ぶことができました。北部病院に来てから、ホスピタリスト(病院総合医)としての実力が

早くから責任が与えられ 活躍できる環境がある

「幅広い症例をたくさん経験し、医局長として組織や地域にどう貢献できるかを考える機会が与えられ、新型コロナウイルス感染症によって地域連携や多職種連携を学ぶことができました。北部病院に来てから、ホスピタリスト(病院総合医)としての実力が

ついたと感じています」

さらに永田先生は新型コロナウイルス感染症患者の診療を通して、集中治療や鑑別診断などを学び直すきっかけにもなったという。

「ネーザルハイフローや人工呼吸器を使うような重症化を防ぐためにはどうすればいいのかを考えたり、診察するとコロナ感染症ではなく別の病気が原因だったことや、別の病気の発見もありました。コロナ感染症に思考を引っ張られながらも、いかに正しく鑑別できるかなど、鑑別診断のトレーニングにもなりました」

若くして医局長という責任を与えられた永田先生は、さらに新型コロナウイルス感染症対策によってマネジメント能力を高め、組織をまとめるリーダーとしての実力も養った。同年代の

医師と比べて、永田先生の経験数は豊富で、責任の重圧も大きい。だからなのか、

永田先生は医師としても人間としてもひと際大きく見えた。そんな永田先生の頼もしい姿に、次世代の沖縄の医療を牽引するリーダーとして大いに期待せずには

いられない。



Profile

大学卒業後、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターで初期臨床研修。同病院にて後期研修。2017年に沖縄県立北部病院の内科に赴任。専門分野は内科、総合診療。





Profile

琉球大学医学部に地域枠として入学。卒業後は豊見城中央病院にて初期臨床研修。2020年に沖縄県立北部病院の内科に赴任。専門分野は内科。



“自分がどうしたら貢献できるのか”を一人ひとりが常に考え、行動する

沖縄県立北部病院 内科 具志堅 愛夏 先生 Aika Gushiken

【出身地】沖縄県南城市 【出身大学】琉球大学医学部地域枠(2016年卒)

医療資源が少ないからこそ一丸となって対応できた

沖縄県立北部病院(以降、北部病院)は327床の中規模病院であり、どの診療科の内科医も総合診療的な役割を担っている。

「北部病院は診療科や専門医が揃っていないため、専門外であっても診ざるを得

ない状況にあります。さらに、救急で診た患者さんをICUや病棟、退院、そして外来のフォロー

まで一貫して担当します。こうした環境はメリットであり、医師としての幅広い実力を自然と獲得

できますし、やりがいも大きいんですよね」と、内科に勤務する具志堅愛夏先生は笑顔で語った。

初めて北部病院に新型コロナウイルス感染症の入院患者が出たのは2020年4月。担当したのは具志堅先生だった。

「感染症対策に中心となって奔走していた永田先生(前ページで紹介)を間近で見えていましたし、PPE着用など感染症対策をしながら当直も外来もさまざまな患者さんに対応していたので自分自身が大変だなとは感じませんでした。むしろ研修医の先生たち

の具志堅先生は笑顔で語った。

「感染症対策に中心となって奔走していた永田先生(前ページで紹介)を間近で見えていましたし、PPE着用など感染症対策をしながら当直も外来もさまざまな患者さんに対応していたので自分自身が大変だなとは感じませんでした。むしろ研修医の先生たち

の具志堅先生は笑顔で語った。

「感染症対策に中心となって奔走していた永田先生(前ページで紹介)を間近で見えていましたし、PPE着用など感染症対策をしながら当直も外来もさまざまな患者さんに対応していたので自分自身が大変だなとは感じませんでした。むしろ研修医の先生たち

の具志堅先生は笑顔で語った。

ちの感染症対策に気を使いましたね」

具志堅先生は卒後6年目だが、研修医へのレクチャーはもちろん、研修スケジュールの調整もしている。医師数が少ない分、さまざまな場面で任される機会も多く、自分がすべきことを自然と考える環境がある。こうした環境に身を置いているからこそ、新型コロナウイルス感染症の波を乗り切ることができたのではと具志堅先生は語る。

「医療資源が少なく、感染者がどれだけ増えるのかわからない状況のなか、感染症対策のシステム作りや、担当、役割を事前にしっかりと取り決め、スタッフ一人ひとりがどうしたら自分が貢献できるのかを常に考えました。これにより、みなが一丸となって感染症対策に取り組めたことが大きいですね」

新型コロナウイルス感染症を経験したこと、医師としては肺の画像診断の勉強にもなったという具志堅先生。経験したからこそ得られた学びは大きいはずだ。

新型コロナウイルス感染症を経験したこと、医師としては肺の画像診断の勉強にもなったという具志堅先生。経験したからこそ得られた学びは大きいはずだ。

新型コロナウイルス感染症を経験したこと、医師としては肺の画像診断の勉強にもなったという具志堅先生。経験したからこそ得られた学びは大きいはずだ。

新型コロナウイルス感染症を経験したこと、医師としては肺の画像診断の勉強にもなったという具志堅先生。経験したからこそ得られた学びは大きいはずだ。

新型コロナウイルス感染症を経験したこと、医師としては肺の画像診断の勉強にもなったという具志堅先生。経験したからこそ得られた学びは大きいはずだ。

新型コロナウイルス感染症を経験したこと、医師としては肺の画像診断の勉強にもなったという具志堅先生。経験したからこそ得られた学びは大きいはずだ。

幅広い診療スキルとマネジメント力を獲得

北部病院の内科は、総合診療力を高めながら、チームを牽引するマネジメント力やコミュニケーション力も獲得できる絶好の環境にある。そして今般の新型コロナウイルス感染症の経験も研修医たちにとって医師人生の糧となる大きな経験となったに違いない。

「北部地域はリハビリ施設も少なく、当院ではリハビリの必要な慢性期患者さんも診ています。症例の多様さ、豊富さでは他に類を見ない病院ですし、手技が回ってくる機会も多い。かといって忙しいすぎることはいずれ、研修医も少人数ですので一人ひとりへのフォローも手厚い。しっかりと遊び、息抜きをしながら、安心して働ける病院なんですよね」と、具志堅先生は微笑む。

新型コロナウイルス感染症への対応は多くの医師たちの心身を疲弊させたが、具志堅先生の表情はとても明るかった。経験が確実に大きな糧となり、みなで協力して乗り切った達成感が勝っている。だからだろう。それを感じることができ、病院は数少ない。

新型コロナウイルス感染症への対応は多くの医師たちの心身を疲弊させたが、具志堅先生の表情はとても明るかった。経験が確実に大きな糧となり、みなで協力して乗り切った達成感が勝っている。だからだろう。それを感じることができ、病院は数少ない。

新型コロナウイルス感染症への対応は多くの医師たちの心身を疲弊させたが、具志堅先生の表情はとても明るかった。経験が確実に大きな糧となり、みなで協力して乗り切った達成感が勝っている。だからだろう。それを感じることができ、病院は数少ない。

新型コロナウイルス感染症への対応は多くの医師たちの心身を疲弊させたが、具志堅先生の表情はとても明るかった。経験が確実に大きな糧となり、みなで協力して乗り切った達成感が勝っている。だからだろう。それを感じることができ、病院は数少ない。

新型コロナウイルス感染症への対応は多くの医師たちの心身を疲弊させたが、具志堅先生の表情はとても明るかった。経験が確実に大きな糧となり、みなで協力して乗り切った達成感が勝っている。だからだろう。それを感じることができ、病院は数少ない。

新型コロナウイルス感染症への対応は多くの医師たちの心身を疲弊させたが、具志堅先生の表情はとても明るかった。経験が確実に大きな糧となり、みなで協力して乗り切った達成感が勝っている。だからだろう。それを感じることができ、病院は数少ない。



Hospital Data

沖縄県立北部病院

〒905-8512 沖縄県名護市大中2-12-3 TEL:0980-52-2719 <http://www.hosp.pref.okinawa.jp/hokubu/>



Iheya 伊平屋
Izena 伊是名
Ie 伊江島
Nago 名護
Kume 久米島
Kerama 慶良間諸島
Naha 那覇

北大東島
Daito
南大東島

Yonaguni 与那国島
Ishigaki 石垣島
Iriomote 西表島
Hateruma 波照間島

Miyako 宮古島



沖縄県地域医療支援センター

Okinawa Community Medicine Support Center

〒903-0215 沖縄県中頭郡西原町字上原207番地
琉球大学病院 おきなわクリニカルシミュレーションセンター内101
TEL: 098-895-1225
E-Mail: chi@w3.u-ryukyu.ac.jp

<http://www.chi.med.u-ryukyu.ac.jp>

